

戦闘の恐怖と寒さに震える難民たち

内戦のシリアに行く



昨年12月4日〜14日までシリア取材を行った。現地ではアサド軍と自由シリア軍との間で悲惨な内戦が続いている。現地からの報告によると、この冬、たくさん子どもたちが栄養失調で亡く

なった、と言う。私は3月末からシリア再入国を予定している。微力ながら、緊急支援活動に取り組みつもりだ。

2013年12月9日トルコ・シリア国境には、トラックの長蛇の列が伸びていた。シリアへの人道援助物資を運ぶトラックが、戦闘の激化によって足止めされているのだ。

紙幅の関係で国境でのひと騒動は紹介できないが、とにかくシリア入国に成功。国道の両サイドにテント群。オリーブ畑の中に青と白のビニールテント。洗濯物が干してあって、子どもたちが水を

汲んでいる。(写真①)

「難民は急増しています。ここだけで数千人」。通訳シハープの解説を待つまでもなく、次々と新しいテントが林立しているのが分かる。

国境から車で30分も走れば、アカラバート避難民キャンプに着く。ここはテントではなく仮設住宅。「5つ星ホテルね(笑)。クウェートからの寄附で建てたよ」。シハープも満足そうだ。

仮設住宅の中に入ってみる。プレハブの2DK。ムハンマドさん(37)はシリア中部ホムス市の出身。(写真②)1年半前、アサド軍に銃撃された。銃弾は体内に



写真①



写真②



写真③



写真④

入ってから爆発するタイプだった。骨は内部で砕け散った。隣で娘が珍しそうにビデオカメラを覗き込んでいる。
ムハンマドさんの仮設住宅を出て、子どもたちを撮影する。松葉杖の子がいる。モハメド君(5)はアサド軍の空爆で父親と自宅をなくした。彼は左足を撃たれ2回手術したが、まだ松葉杖がないと歩くことができない。(写真③)アサド軍の空爆は無差別殺戮なので、民間人、特に子どもに犠牲が集中する。
車でさらに20分ほどオリーブ畑を走ると、アルラハマキャンプが現れる。ここは「昨日、今日逃げてきた」できたてはやほやのテント群で、主に未亡人、孤児たちが生活している。訪れた日は例外的に暖かかったが、夜間は氷点下に気温が落ちる。もともと山の中のオリーブ畑だ。標高も高いし、強風が吹き付ける。そんな中でビニールシート一枚のテント。このままでは凍死するのでは？

国境への帰路、新たなキャンプができていたことを発見。たくさんテントが建てられている。(写真④)本当はゆっくり取材したいの

だが、その様子だけを撮影する。夜になると、この地域では激しい戦闘が始まる。それまでに国境を越えてトルコに逃げないといけない。午後4時半、無事シリアを脱出。日暮れが近い。人々はこの厳しい冬を乗り越えることができ

るのだろうか。

『緊急のお願いです』

今回の緊急援助で約150万円分の毛布と医療品を配布しました。そして「イラクの子どもを救う会」の支援金が、ほぼ底をつ

いてしまいました。現地では銃弾を受けた子どもが、麻酔なしで足の切断手術をしています。医薬品が不足しているので助かる命も助かりません。3月末にまた再入国にチャレンジします。長引く不況の上に、4月から消費税増税と

いう状況の中ではありますが、ぜひ趣旨にご理解いただき、緊急シリア募金にご協力ください。

●募金の宛先
郵便振替 00970552265001
イラクの子どもを救う会

やめて! 保育園の民営化

2月16日、「守るっ! 吹田の子育て2・16旭町パレード」が開催され、保育士、保護者、地域住民の方々350名が参加した。
今回、民営化の対象となっているのは岸部、藤白台、南、西山田、吹田保育園の5園。パレードに先駆けて開催された集会では、「今年度の待機児は200名を超える状況。子育てする環境を公的責任で保障してほしい」「幼保一体化によって、公立幼稚園の廃園が狙われているが、公立幼稚園での3年保育こそが保護者の願い。慎重な検討を」などの発言が続いた。

JR吹田駅前でも市民パレード

JR吹田駅前までの商店街を通り抜けてのパレードには、バギーを押したり、子どもの手をひいたお母さんたちも多く参加して、あらためて批判の声が大きいくことが示された。「子育てするなら吹田」と言われ、近畿地方で「住みやすさ第1位」と評価されてきた吹田市だが、このような「維新流の福祉切り捨て政治」で、その地位は危うくなっている。

市民の反対押しつけて

北千里保育園と古江台幼稚園が一元化?

保育園の民営化と並んで、大きな批判の声にさらされているのが、「北千里保育園と古江台幼稚園の幼保一元化」だ。保育園、幼稚園の保護者の多くが反対しているにもかかわらず、こちらも強引に一元化(統廃合)を進めようとしている。このまま強引に進めていけば、「拙速」という批判は免れない。

フォーカス focus

「住みやすい街ランキング」府内で1位、ファミリー層では全国11位「市報すいた」3月号は、「住み続

けたいまち吹田」の大見出しを掲げた。人口減少時代にあっても吹田市の人口が増えていることに着目、いかに住みやすい街(市)づくりをすすめてきたかを報じている。掲載された井上市長の写真も、満悦の様子だ。

住みやすい街ランキング

横には、「このエリアの物件」が紹介されている。

不動産情報サイトだけに、「便利さ」を「売り」にするのは当然だ。しかし、住民と市政を結ぶ媒体たる吹田市の広報紙上で、数々の開発プロジェクトをあげ「このチャンスを最大限に生かし、より多くの人を呼び込む」と意気込んでいるのは、不動産屋の社長ではなく井上市長だ。もはや自分の役割をお忘れになったようだ。

高度成長時代から人口抑制政策で住環境を守り、今日の「住みやすい街」の基盤をつくってきたかつての吹田市。人口目標は35万人とし、開発を規制・誘導、都市公園をはじめ環境整備を図ってきた。かたや、人口減少時代に大型開発と人口呼び込みに躍起の井上市政。環境に、地域社会に、行政に、どのような負荷がもたらされるのか、その対策は…「市報すいた」は「言も語らない」。

(つもほる)



「保育園の民営化反対!」寒風の中350名の市民がJR吹田駅前をパレード